

# 江戸後期における兼六園の水みちの変遷に関する研究

金沢工業大学 学生会員 ○本間一誠  
 金沢工業大学 正会員 神山 藍

## 1. はじめに

兼六園は、特別名勝に指定されており、水戸の偕楽園、岡山の後楽園とともに、日本三名園の一つに数えられている。兼六園は、北西部の蓮池庭と東南部の千歳台に分かれている。この千歳台において作庭を行った人物が、12代藩主前田斉広と13代斉泰である。12代斉広は、文政5年(1822)に千歳台に完成した自身の隠居所である竹沢御殿内に曲水を引き入れ、築山を築いた。斉広の死去後、藩主となった斉泰は、竹沢御殿を逐次取り壊しながら作庭を進めた。安政期(1854~59年)には、千歳台と蓮池庭の調和を図り、江戸時代を代表とする林泉回遊式大名庭園を造り上げた。

兼六園は、優れた景観の代名詞である「六勝」を兼ね備えた庭として、相反する景観を調和させ、美しさを演出している。その名の由来である「六勝」とは、中国の宋時代の詩人である李格非が書いた「洛陽名園記」からとり、宏大・幽邃・人力・蒼古・水泉・眺望の六つの景勝を兼ね備えた庭という意味がある<sup>1)</sup>。

そこで、本研究では、兼六園の作庭が成熟期であった文政期(1818~29年)、天保期(1830~43年代)、安政期(1854~59年代)、文久期(1860~63年代)にあたる江戸後期に着目し、「六勝」のひとつである「水泉」に焦点をあて、水みちの変遷を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

本研究では、まず、文政期から文久期に描かれた4枚の古絵図をもとに、AutoCADによる水

みちの再現を行う。さらに、年代ごとに重ね合わせを行う(表-1)。

次に、平成期(2015年)の兼六園の白図をもとに、AutoCADによる水みちの再現を行う(表-1)。そして、水みちの形状を詳細に把握するために、図-1のように20の領域に分割を行う。さらに、現地調査により、水みちの流水形状と流水の様子を把握を行う。

水みちの流水形状を図-2の模式図をもとに分類を行う。流水形状は、連続して蛇行している水みちの角度が90°以下の場合を蛇行(鋭角)の流水形状とし、90°以上の場合を蛇行(鈍角)の流水形状とする。なお、水みちの蛇行が連続しておらず、曲線状となっている場合の流水形状は、湾曲とする。また、文政期から文久期において、変化が顕著に表れている年代の色分けを、天保期は橙色、安政期は緑色、文久期は紫色とし、図面上に表示する。



図-1 水みち分割図(白図に筆者加筆)

表-1 参考資料一覧

番号	史料名	年代	所蔵	概要
1	竹沢御殿御引移前総絵図	文政6年(1823)	金沢市玉川図書館	文政年間の兼六園の図であり、水みちの判読が可能
2	竹沢并蓮池御庭御園之図	天保10年(1839)~弘化4年(1847)	金沢市玉川図書館	天保、弘化年間の兼六園の図であり、水みちの判読が可能
3	竹沢御屋敷総絵図	安政3年(1856)	金沢市玉川図書館	安政年間の兼六園の図であり、水みちの判読が可能
4	兼六園図	文久3年(1863)以降	金沢市玉川図書館	文久年間の兼六園の図であり、水みちの判読が可能
5	兼六園平面図(白図)	平成27年(2015)	石川県金沢市・兼六園管理事務所	現代の兼六園の図であり、水みちの判読が可能

流水形状	直線	蛇行(鋭角)	蛇行(鈍角)	湾曲
模式図				
図面(例)				

図-2 水みちの流水形状模式図

### 3. 分析結果と考察

水みちの変遷を文政期 - 天保期, 天保期 - 安政期, 安政期 - 文久期の3期に分けて比較を行い, 水みちの変化が顕著に表れている年代と流水形状を把握した(表-2)。また, 水みち幅や落差は, 現代の水みち幅や落差を参考に算出を行った。これより明らかとなった水みちの変化が顕著に表れている年代を図-3に示す。

図-3の領域1では, 天保期に変化があり, この領域は, 文政期以前から池泉と水みちが存在していた。天保期にわずかに池泉と水みちの流水形状の変化がみられた。領域2においても, 天保期に変化があり, この領域は, 文政期に12代斉広が, 隠居所として竹沢御殿を建てた場所である。文政期から天保期にかけて, 藩主が12代斉広から13代斉泰に交代し, 竹沢御殿が取り壊されたことで, 水みちを造成できる領域が拡大したことが要因のひとつであると考えられる。領域1, 2の水みちは, 蛇行(鈍角)の流水形状である。領域3では, 安政期に変化があり, 領域2と同様に, 文政期に存在していた竹沢御殿の縮小に伴って, 水みちが造成されたといえる。領域3の水みちは, 蛇行(鈍角)の流水形状である。領域4では, 文久期に変化があり, この領域では, 文久期になると縮小していた竹沢御殿がすべて取り壊され, 水みちを造成する場所が拡大した。よって, 湾曲の流水形状をした水みちを造成できると考えられる。領域5では, 文久期に変化があり, この領域は, 現代では池泉と水みちが存在しているが, 文久期に水みちが確認できたため, 文久期以降に水みちが造成された場所だと考えられる。領域4, 5の水みちは, 湾曲の流水形状である。

表-2 江戸後期の水みちの分類(代表例)

番号	変遷			水みちおよび池泉の 変化年代	水みちおよび池泉の流水形状変化 (文政期から文久期)	水みち幅	落差
	文政期～天保期	天保期～安政期	安政期～文久期				
1				-	直線のまま変化なし	2m	-
2				天保期	直線から蛇行(鈍角)	2~6m	1m
3				天保期	直線から蛇行(鋭角)	2~3m	-
4				文久期	湾曲	1~7m	-

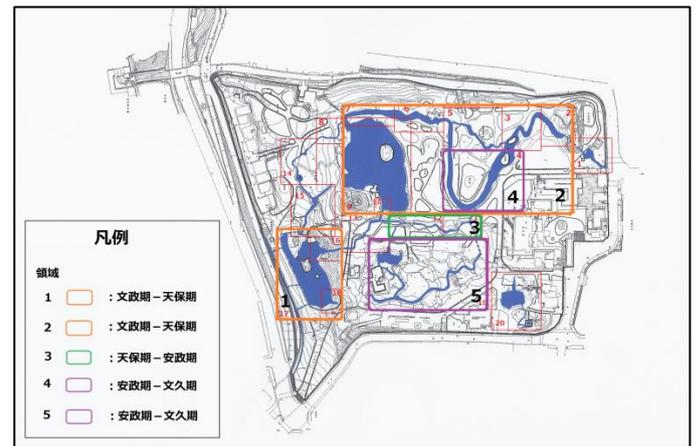


図-3 年代別色分け図(白図に筆者加筆)

### 4. まとめ

文政期 - 天保期は, 領域1において, 文政期以前から池泉と水みちがわずかに変化し, 領域2においては, 竹沢御殿の縮小に伴って, 大々的な水みちの造成が行われたということが明らかとなった。

天保期 - 安政期は, 領域3において, 竹沢御殿の縮小に伴い, 御殿周辺の水みちが整備されたということが明らかとなった。

安政期 - 文久期では, 領域4において, 竹沢御殿がすべて取り壊され, 大きく湾曲した流水形状の水みちが造成された。また, 領域5においては, 現在の水みちの足掛かりとなるような湾曲の流水形状をした水みちが造成されたということが明らかとなった。

### 参考文献

- 1) 飛田秀一:「石川県大百科事典」, 北國新聞社, 1993.
- 2) 角川春樹:「角川日本地名大辞典」, 角川書店, 1981.
- 3) 長山直治:「兼六園を読み解く その歴史と利用」, 桂書房, 2006.